

山田史郎、北村暁夫、大津留厚、
藤川隆男、柴田英樹、国本伊代、著

『移民』

(望田幸男・村岡健次 監修『近代ヨーロッパの探究』1)

田中きく代

近代の移民は、社会経済的な人口移動である。地域移動の形態を取るにしても、さらに国際移動の形態を取るにしても、世界システム論が示すように、巨視的には資本主義化の諸力に押し流される過程であり、人々には抗うことができないように見える。また、移民個人の動機を考えるにしても、まずは経済的動機が優先される。しかし、移民史家を魅了するのは、生まれた土地を去り新しい約束の土地をめざす人々が、資本主義化の波に受動的に押し流されたのではないという事実である。移民の多くは、「普通の人々」であったが、彼らにとつて移住はむしろ可能性への選択であった。移民はいくつかの選択肢の中で積極的な選択をしたのであり、その上で家族やエスニック集団の絆を頼りに、強靱な生命力を示し様々な生を生きた。移民によって、出身地の文化が移民先に移動され、そこで再創造され、時には出身地にフィードバックされた。移民史では、経済的な要因と文化的要因を融合させる、すなわち構造的なものに文化的・認知的なものを統合させ全体を捉えることが求められているが、本書はそうした壮大な目的のもとに書かれたものである。

プロードルは、フェリペ二世時代の地中海を全体として捉えようとした。同じように、十九世紀初頭から二〇世紀初頭の時代を考えると、大西洋はこの時代の中心であり、ひとつの総体として捉えられる。大洋とその周りに位置するヨーロッパ、北アメリカ、南アメリカ、アフリカを含める領域は、この時代に未曾有の人口移動と、それによる共通の政治、経済、社会、文化的交差を経験した。この中で、アメリカ合衆国への移動は人数的に多いとは言え、特別なものではない。本書では、この大西洋の人口移動の経緯を克明にたどり、大西洋をひとつの有機的存在として再構築する視点が提起される。ヨーロッパとアメリカ、旧大陸と新大陸を繋ぐ歴史を書くこと自体がまだ充分とは言えない現状であるにもかかわらず、本書の視点はそれを大きく越えたところに据えられており、地球的規模で世界を理解しようとしている。このように大西洋領域を全体として捉え、そこに見られる経済的人口移動の道筋に、「普通の人々」の文化的生きざまを盛り込むような視角は、歴史学の今後の可能性を垣間見せる。こうした視点は、古くは移民史のパイオニア的存在であるハンセンにも見られたし、シスルスウェイトが強調したことであるが、それらは構想のみに終始しがちであった。最近では、ヌージェントの著作などに実証への模索が見られるが、それでもプロードルの世界からは程遠い。このような研究状況の中で、最先端の目的意識を持った実証的な研究成果が発表されたことは、日本の西洋史学の貴重な成果である。

本書は第一部「越境の軌跡」と、第二部「越境者と国家」から構成される。第一部においては、第一章でイタリヤの移民として、

「ヴェネトからブラジルへ——世紀転換期におけるイタリア移民の「様態」——」（北村晁夫）、第二章で東欧の移民として、「ガリア・ユダヤ人のアメリカ」（大津留厚）、第三章でオーストラリアへの移民として、「大洋を渡る女たち——十九世オーストラリアへの移民——」（藤川隆男）の諸論文が寄せられている。第二部では、第四章でドイツへの移民として、「第二帝政期ドイツにおける外国人労働者」（柴田英樹）、第五章で米國への移民として、「ホワイト・エスニックへの道——ヨーロッパ移民のアメリカ化——」（山田史郎）、第六章でラテンアメリカへの移民として、「約東の大地ラテンアメリカとメノナイト——プロテスタント再洗礼派メノナイトの流転と転住——」（国本伊代）の諸論文が集められている。この構成からも理解されるように、本書がこの一冊で、大西洋移民をすべて描き出しているわけではない。ここで語られる移民は、エスニック集団においても移動の形態においても極めて限定されたものである。さらに、イギリス諸島からオーストラリアへととなると、厳密に言えば大西洋移民ではない。しかし、一八八〇年代ぐらいまで主流であった西欧からの旧移民のうち、ドイツ人と共にそのほとんどを占めたアイルランド人が対象とされているし、一八九〇年代以降の新移民のうち、その主流であった南欧と東欧から、移動数においても顕著なイタリア人とユダヤ人が扱われている。移動形態についても、大西洋を渡るだけでなく、ドイツへの移民のように、ヨーロッパ内での移動も射程に入られているし、メノナイトのように、ロシア、カナダ、ラテンアメリカへと流転し転住する移動にもふれられている。オーストラリアへの移民も、旧大陸から新大陸への大量移民時代の、

より広域的な移動と捉えるなら、よりグローバルなフレームワークを与えてくれる。

ところで、本書では移民を総体的に捉えるために、第一に、単純なプッシュ・プル理論ではないものが求められている。従来の研究では、労働の需要供給関係に言及したり、それを越える場合でも、送出国側の移出事情であるプッシュ要因か、受入側の受入事情であるプル要因のどちらかに偏りがちであった。本書は、必ずしもすべての論文で、出身地と移民先の要因がともに描き出されているとは言えないが、それぞれの著者がプッシュ・プル要因による解釈を越えようとしているのが明白であり、しかも途上の比較史の方法が示唆されているものが多い。第二に、総合のために比較史の方法が示唆されておく必要があるが、その間のどこに位置するかを決定する作業が求められるが、ある程度限定しておくけば、二つのグループに焦点を絞った比較のほうが生産的である。本書において、比較の方法に一定性はないが、それぞれの論文で様々な比較の観点が示されていて参考になる。第三に、本書は複線的な同化の過程と、多様なアイデンティティの有り様を射程に入れて、移民集団の戦略的な同化と反発の姿をたどっている。ことに、本書が取り扱う時期は国民国家形成の時期であり、国民的アイデンティティの創出に移民のアイデンティティの形成が交差する。また、植民地獲得競争の時代でもあり、宗主国と植民地での様々なアイデンティティが交錯^③する。

次に、上記の三つの観点を中心に、それぞれの論文を紹介し、私見を述べたい。本書の第一部「越境の軌跡」では、国境横断的

に出身地から目的地に至る移住の道筋をたどることを目的としている。だから、移民送出国側の要因であるプッシュ要因、移民受入側の受入要因であるプル要因、さらに移動途上の要因である連結要因を、丁寧に並べていく作業がなされている。

北村論文では、一九世紀後半から二〇世紀初頭におけるイタリヤ最大の移民送出地域であったヴェネト州からブラジルに向かった移民を取り扱っているが、同じブラジルに移住したヴェネト移民の内でも、出身地において山間部からの移民と沿岸部・平野部からの移民の二種類があることが指摘される。前者は土地所有の小・中規模農家が多く、ヨーロッパ地域への出稼ぎが仕事のひとつとしてほぼ慣習化していた地域である。後者は、大借地経営農場で雇われる農業労働者が多かった地域である。この二つのグループのブラジルでの入植先は異なり、前者は南部三州のぶどう栽培などで勤勉に励み、権威と秩序を尊重する伝統的なカトリック文化を移植した。後者は、サンパウロのコーヒープランテーションに入植し、農業労働者の闘争の伝統を保持し、それでも権威や公権力への嫌悪や抵抗を示した。農業構造をはじめとする社会的経済的環境と共に、移民の生活世界や社会的結合にも注意を向ける優れた論文である。ただ、ないものねだりを言えば、先住民ならびにドイツ系との関係にはふれられているものの、これら以外のエスニシティとヴェネトからの移民との関係が不明確である。「ヴェネトからブラジルに向かった移民たちは、ポルトガル系、先住民、奴隷から解放されたアフリカ系住民、ドイツ系移民、イタリヤ南部からの移民などから構成される多元的なブラジル社会にいかなる位置を占め、いかなる役割を果たしているのか」とい

う問いかけを具現化した多元的空間を提示してほしい。

大津留論文でも、プル要因とプッシュ要因が明確に位置づけられる。また、船会社などの移動のメディアを取り上げ、連結要因の重要性をも指摘している。多民族、多宗教の社会であったガリツィア地方では、ユダヤ人はシユエトルで穏やかな生活を送りながらも、世俗国家への忠誠とイディッシュ語の保持などで将来を模索していたが、アウスグライヒ下で特権が奪われ、隣国ロシアでボゲロムがおこるようになると、移住を決意せざるをえなくなつたという。ボゲロムなど当時の状況が史料に基づいて鮮明に描かれており、この移住過程の説明は説得力がある。彼らの移住先はというと、主たるものはニューヨークであったが、帝都のウイーンも重要であった。選択要因に関してはあまりふれられていないが、筆者の意図は移住先での社会状況と変容の差異との関係にあり、興味深い比較が試みられる。同郷人団体を軸に人的結合を図り、社会主義とアメリカの夢を同時に描くニューヨークのユダヤ人に対して、ドイツ語世界に同化した先人のユダヤ人の多いウイーンでは、ガリツィアからのユダヤ人は伝統と変容の問題を抱えることになつた。筆者が、前提として述べているように、ガリツィアからのユダヤ人移民を、東欧ユダヤ人の移民の一環として見ることに限界がある。また、オーストリア・ハンガリー帝国からの移民の中に位置付けることも単純ではない。しかし、一般化の問題に慎重に対処した本論文では、「迫害」や「貧困」だけでは説明できない、移民の複雑な諸側面を垣間見せてくれる。

藤川論文は、連結要因である移民船の社会に注目する。連結要因としては、従来、奴隷貿易や移民貿易に関する研究は存在した

ものの、移民船を空間的に分析したものは少ない。大洋という国境を長い時間かけて越える姿を描写することで、移民が移民先を持ち込もうとした文化的なものを解明しようとする意欲的な論文である。移民船での生活は、新世界の住人となるための通過儀礼ではなく、出身国での階級秩序や規範を刻印し、移民先に移植する儀礼であったという主張は興味深い。特に、移民女性に焦点が置かれており、女性自身の日誌や手紙の精緻な分析に基づいて語られる、船上での目に見える階級区分、上品さを有徳とする社会意識について、説得力のある論議が提示される。ただ、極めて少数のキャビン客側からほとんどが描かれていて、それで圧倒的多数の下級のステア리지客をどの程度把握し得るのかに、多少の疑問が残る。イギリスを出る以前から移民は既に大きな構造的なものに組み込まれているのであり、その拘束から逃れることはない。だから、構造的なものの表出としてキャビン客の意識をたどることは有益である。また、一般の移民にとっても、キャビン客の上品さは成功の証としての手本でもありえた。しかし、同時に、アイルランド人移民の「ウェイク」(アメリカ連夜)にみられるように、一般の移民は意図的に自らを祖国と切断し、積極的に通過儀礼的なものを受け入れたことも事実である。もともと、オーストラリアへの移民は、長期間ではあるが陸地近くを通り、寄港することもあるからか、火をおこすことも限られていた大西洋の移民と比べると、物理的にも精神的にもゆとりがあるように思える。人間を二倍も三倍も乗せながら、定員分以下の粗末な食料しか乗せないような移民船の場合とは、決定的に異なる点があるのかもしれない。

本書の第二部「越境者と国家」では、国民統合の視点から、しかもホスト集団による上からの同化・排除の政策だけに視野を限定しないで、越境者の側から逆照射することを目的としている。

柴田論文では、一九世紀末に移民送出国から労働力輸入国に移行したドイツに焦点を当て、第二帝政期の国家形成過程における入移民の問題を考察している。一般に、外国人労働力は、国内労働者の保護や文化的同一性の維持の問題を生じさせるが、未だ統一国家として不安定であったドイツでは、それらは国家ないし民族のアイデンティティに深刻な影響を与えた。そこで、政治的には、海外移出を促進しながら国内への移入に関しては市民権・定住権取得資格を厳格にしたが、経済的には、商工業部門の膨張する労働力需要を満たすために、安価な外国人労働力を積極的に導入せざるをえなかった。この政治的利害と経済的利害の相克の中で、外国人労働力を底辺労働者しかも季節労働者として固定化する構造が作り上げられたが、本論文ではこの過程が、東部甜菜栽培農園の外国人ポーランド人と、南ドイツレンガ製造業のイタリア人ととの比較によつて語られる。外国人ポーランド人と国内ポーランド人の明確な線引きをせざるを得なかった東部地域の方が、法的規制が厳しく、外国人労働者の持続的な定住を禁止し、その労働を未熟練の単純な作業に限定した。イタリア人移民の場合も、底辺の季節労働者ではあったが、法的に優遇され定住も可能であったから、蓄積した資金を元手に独立的営業を営む者もあった。もともと、外国人ポーランド人も受動的に条件を許容したわけではない。労働需要が大きかったからではあるが、頻繁に「契約やぶり」という抵抗がなされ、好条件のところに移りえたことは、

逆照射の事例として関心が持たれる。外国人問題を考えるとき、「よそ者」と「内なる者」を分ける境界、すなわち定住権や市民権の問題は、救済の問題を含めて地域レベルで克明に跡付けられなければならないが、本論文ではそうした成果が比較の視点を持ちながら、経済的要因と政治的要因との結合の中に位置付けられている。

山田論文では、米国におけるヨーロッパからのカトリック系移民に焦点を当て、「上からのアメリカ化・同化の強制」としてよりも、「下からの白人アイデンティティと統合の探求」に注目する。新着移民への排斥運動と、劣悪な労働条件の下で、例えば一九世紀のアイランド人は、アメリカで意図的に「白人」となり、劣等の烙印を拭い去ろうとしたとする。民主党や労働組合を通して、近い位置にいた黒人との間に線引きをすることで、黒人の徹底的排除を試みたと論及する。また、社会上昇の手段として教育に関心を向け、民族的特質を保持するためにカトリック学校を維持し、公立学校との連結を求めするために学校運営に積極的に参加するカトリックの姿を描いている。カトリック移民の中でも、ワスプではない最初の大量移民であるアイランド人を中心に論及されており、その「白人」イデオロギーがその後のホワイト・エスニックに植えつけられていく過程は、米国の人種・民族関係を考える上で、きわめて示唆的である。さらに、ミンストレル・ショーなど娯楽空間にも言及し、「白人化」という形でメディアに見られた権力構造の表出に注意を向ける。ガス燈の導入で真昼のような舞台上で、可視的に黒人を揶揄する演芸は、それを観るアイランド人の紐帯を強化したし、他者に対しても黒人と一線を画

させる動因となった。もつとも、捨て去ろうとする自らの民族的文化と黒人文化との類似が、個人レベルでの「白人」化をさらに推し進めたのかどうか、プライベートな側面も含めて今後さらに教えてほしい。

さて、アイランド人の「白人」化の戦略を、前工業的な農村社会から産業資本主義社会への移行と適応を、アメリカで強く迫られた結果だと強調することには、疑問が残る。アイランドでは為政者であるブリテン人を「白人」とみなしても、自らをそう見ることにはなかった。それは確かである。しかし、アイランド人の移民の慣行は少なくとも一八世紀には遡ることができ、アイランド人が純粋な前工業的農村社会の価値観を持っていたとは言いがたい。資本主義化の中で抑圧された負の存在であったとしても、実体においても意識においても近代的存在に転換していたと考えられる。近代化に組み込まれていたアイランド人が、アメリカでかつての為政者側のイデオロギーを身につけるようになったことに注目したい。移民がアメリカで成功の夢を見るのが歴史のリアリティではないか。さらに、アイランド人移民の特徴として、民族的アイデンティティと米国への忠誠心の融合が最初から見られたことが上げられるが、そうした側面も意図的に住まう「場」を求めた結果であり、そこにはアメリカから祖国の独立運動を支援しようとする、従属を余儀なくされた民族の過去が見える。

国本論文は、メノナイトの流転と転住の軌跡を追うことで、最終地ラテンアメリカまでの移動の有り様と、そのエスニシティの

形成、発展、変容をたどるものである。メノナイトは幼児洗礼・誓言・兵役などを拒否し、独自の伝統的習慣とドイツ語を保持できる宗教共同体の実現を目指して、流転と転住を繰り返した。その逃避と拡散は、一六世紀前半の成立とほとんど同時に始まったが、一七世紀にはヨーロッパからニューヨークとペンシルヴァニアへ、一八世紀にはロシアのウクライナへ、そして一九世紀にはロシアから北米へ、さらに二〇世紀になるとカナダからメキシコとパラグアイへ、さらにメキシコから中米ベリーズとボリビアへと言う長い流転の旅をたどる。本論文では、そのうち低地諸国からバルト海沿岸地方に移住し、やがて一八世紀の末にロシアへ移動した後、さらに一九世紀後半にカナダへ転住した集団の軌跡が克明に跡付けられ、その経緯はエスニシティの変容が一元的ではなく多様であったことを物語る。それは居住地での国家形成の過程によつて左右されるものであり、当初は経済的發展のために優遇されても、やがては国民形成の中で異質なるものとして統合を余儀なくされ、結果として転住を繰り返すことになった。ところで、メノナイトという極めて閉鎖的な宗教集団を取り扱う利点はどこにあるだろうか。その集団の固有の特性を見、宗教集団がエスニシティを形成する過程を知るのみでも、関心は尽きない。また、メノナイトが入植先で固有のコロニーを形成しながらも、周りの社会や国際社会に与えた影響についても興味深い言及がある。だが、本論文はそれ以上に比較の上で有意義である。メノナイトを受け入れた諸国家の、経済的側面のみならず、国民形成に見る普遍的側面と特有の側面を見出すことができ、相互の比較が興味深い。また、諸国家の招聘政策にそれぞれの時代のグローバルな

諸関係が映し出されている。独自の伝統と正当性を追求する共同体の意志と、国民国家の統合原理とのほゞまで流転を繰り返したメノナイトの軌跡は、近代の移民史を貫いて、それぞれの時代に地球的規模で諸エスニシティを位置付けていく確実な指標となりうる。

本書の概要を紹介し、私見を付け加えてきたが、本書が移民史のあまりに多様な諸相を提示しているので、とうてい全てを著しえたわけではない。さらなる評価は本書を読まれる方に委ねざるをえない。ただ、最後に付け加えになるが、「transnational」という用語が曖昧で多様に使用されるために、日本語の「越境」では全てを捉えきれない点になる。また、チェーン・マイグレーションの概念など、筆者によつて多少相違があるのも気になる。しかし、複数の筆者による共著であるにもかかわらず、全体として統一が取れており読みやすい。その他にも随所に読みやすい本作りの工夫がなされており、丁寧なつくりになっていることは、ひとえにコンヴェイナーによるところが大きいと思える。特に、コラムが目を引くが、映画や食べ物など、移民の生活についての秀逸な解説がそれぞれの筆者によつて添えられている。より広い読者に本書がさざげられていることに、移民史の裾野がさらに広がるのが予見でき、うれしがいかりである。よい本が出たことを感謝したい。

- ① Marcus Lee Hansen, *The Atlantic Migration, 1607-1860* (Harvard UP, 1940); Thomas Bingley, *Migration and Economic Growth: A Study of Great Britain and the Atlantic Economy* (Cambridge UP, 1952); Frank Thistlethwaite, "Migration from Europe Overseas in

the Nineteenth and Twentieth Centuries," in Herbert Moller (ed.), *Population Movements in Modern European History* (NY, 1964), 73-92.

② Walter Nugent, *Crossings: The Great Transatlantic Migration, 1870-1914* (Indiana, 1992, 1995), 3-10.

③ Virginia Yans-McLaughlin (ed.), *Immigration Reconsidered: History, Sociology, And Politics* (Oxford, 1990), 3-18; Mark Wyman, *Round-*

Trip to America: The Immigrants Return to Europe, 1880-1930 (Cornell UP, 1993), 3-14.

(A 5 判 X + 三三五頁 文献解題一五頁 一九九八年二月
ミネルヴァ書房 三六〇円十税)
(関西学院大学文学部教授)